



子連れで赴任すること

げんかまきこ
源河真規子

欧州連合日本政府代表部・一等書記官

家族（子供）を連れて初めての土地に赴任するに当たっては、新しい仕事に対する期待と同時に生活面の大きな不安がつきまといまいます。学校、医療機関、買い物、交友関係等々。海外に赴任する場合には、これに言葉の問題が加わります。ベルギーに赴任して1年9ヶ月。赴任前の多くの不安は、職場と家族と友人の協力で少しずつ解消し、何とか今に至っていますが、言葉はやはり大きな壁。我が家の1年9ヶ月を振り返ってみたいと思います。

赴任が決まって真っ先に思ったのが「保育園を探さなければ！」でした。ベルギーの幼稚園・保育園事情に係る情報収集にはインターネットやメールが大活躍。調べてみると、待機児童が多いこと、保育園は原則として3歳までで2歳半から幼稚園に入園できること、幼稚園によっては預かり保育があり18時まで預かってくれることが判明しました。「ベルギーにも待機児童！」「2歳半から幼稚園に入園！」といちいちびっくりし、「就学前なら子供2人は一緒に通えるから言葉ができなくても互いに助け合おうだろうと思っていたのに！」とがっかりしました。それでも、数ヶ月の待機を覚悟して息子のために保育園を申し込んで1ヶ月分の保育料を前払いし、娘のために幼稚園入園を申請しました（それも、空きがないので「最初は午前中だけ」と園長先生に言われてしまいました）。子育てと仕事を両立するのはどこの国でもまだまだ大変であることを実感し、ベルギーのワーキングマザー（&もちろんワーキングファーザー）にちょっぴり親近感も感じました。

日本では、ベルギーの公用語であるフランス語やオランダ語はもちろん、英語すら全く解さなかった我が家の子供達（親が教えていないのだから、当たり前なのですが・・・）。「集団生活をしていけるだろうか？そもそもベルギーで生活できるのだろうか？」と大変不安でした。子供用英語教材は巷にあふれていたけれど、フランス語教材は意外と少なくインターネットで探して購入しました。ただ、赴任前は時間がなくて結局封を開けないまま。先輩には「みんな、最初は言葉で苦労するんだよ。苦労するのが当たり前だと思った方がいい。」と励まされたのですが、案の定、娘が物珍しさもあって元気に通ったのは最初の頃だけ。事情がわかってくると、毎朝毎晩「幼稚園に行きたくない。ねえ、幼稚園に行かなくていいでしょ？」と言って泣いていました。唯一の救いは同じクラスに日本人の女の子がいたこと。朝はその子が来るのを幼稚園の金網にへばりついて待っていました。フランス語の上手な友人からは「親がまず現地の子供達に話しかけて、自分の子を子供達の輪の中に入れてあげることが大事。クラスの友達を自宅に呼んで、子供と一緒に遊べる環境を作ってあげるのも良い。」と言われ、そうか、そうやって環境になじんでいくんだなぁと納得したのですが、私の片言のフランス語ではその役割が果たせませんでした。ネイティブ・スピーカーばかりの会議やパーティーに出席して、周囲が笑っているのに何が面白いのか私は全く理解できず、会話にもついていけず、逃げ出したい気持ちになった経験は私にもありました（今でもありま



す)。だから、娘に「一人で立っていても友達はできないよ。みんなの遊んでいる方に行かないと。」と言ってはみたものの、自分ができないことを子供に薦めるのは非常に罪悪感でした。思えば、昔は帰国子女でべらべらと外国語を話す友達を見て「いいなあ。苦労せずにあんなに上手に外国語が話せて。私も外国に住みたかったなあ。」と羨ましく思ったものです。今、考えると、私はその友達の苦労した後の上手に話せるようになった姿しか見ていませんが、海外生活中はきっと人には言えない苦労と努力をしたのだらうと思います。

半年ほどの待機期間を経て保育園に入園した息子の方も、最初の頃は大通りまで声が聞こえるくらい大きな声で泣いていました。ただ、まだ2歳未満で日本語もあまりできなかったこともあり、フランス語環境に比較的早く馴染みました。嫌だと言う時に「ノン！」と言ったり、「ブラボー！」と手を叩いたり……。食事のテーブルについて「アトン！（待つて、の意）」と大声を出したのには笑ってしまいました。きっと、食事が前に並べられるとすぐに食べようとして、「待ちなさい」と先生に注意されていたに違いありません。

さて、娘が泣いていた日々から1年強が経過しました。時が少しずつ解決してくれたようで、今でも言葉は完全にはわからないようですが、友人達の輪に入って適当に遊んでいます。家でも、フランス語の歌を口ずさんでいることもあります。きっと良い幼稚園に巡り会ったのだと思います。ただやっぱり日本と日本語が好きならしく、「日本に帰りたいな」「日本のおうちの玩具で遊びた

いな」と話しながら日本語のビデオや絵本を楽しんでいます。息子の方は、羊を指さして、時には「羊ちゃん」、時にはフランス語で「ムートン」と言っていますが、本人が同じものと認識できているのかやや疑問であります。息子の場合は、正しい日本語が話せるようになるかどうかの方が問題だなあ（フランス語は帰国したらすぐに忘れてしまうでしょうから）と思います。

家族（子供）連れで赴任するのは、やっぱり大変、親の都合で（言葉は悪いですが）子供を振り回して良いのだろうか、と思うこともあります。ただ、こんなに幼い時期に、日本語が通じない世界があること、世の中には色々な国籍や人種の人がいることを知ったことは、子供にとって貴重な体験だったのではないかと前向きに考えるようにしています。事実、娘は「Aちゃんのママは中国人なんだって。」「B君はロシアから来たんだって。」「Cちゃんはオランダのおばあちゃんの家遊びに行くんだって。」と色々な国名をまるで日本の一地方の地名のように日常会話の中で使っています。少し覚えたフランス語はすぐに忘れてしまうでしょうが、種々の国籍を持つ友達と遊んだ日々が記憶の片隅に残っていればいいなあと思っています。

帰国を思う時、「保育園・学童はみつかるだろうか？」という不安がまた頭をよぎります。子連れ赴任に関しては、子供がある程度大きくなるまで、学校関連の悩みがつきまとうのだと思います。またきっと、良い保育園・学童に巡り会えますように！